

# 非完全関係に基づく重名詞句移動の線形化

坂本瑞生

## 1. 導入

英語は無標の SVO 語順に加えて、直接目的語が文末に生起する重名詞句移動(Heavy NP Shift: HNPS)を許す。無標語順(1a)は任意の焦点解釈を許すのに対し、HNPS(1b)では文末に移動した要素が義務的に焦点解釈を担う。

- (1) a. John brought a painting that he liked for his mother.  
b. John bought for his mother a painting that he liked. (Rochemont and Culicover 1990: 116)

本論は、無標語順では焦点要素の位置が自由である一方で、HNPS では焦点位置が移動要素に固定されるという記述的一般化に対して、原理的な説明を与えることを目指す。具体的には、両者の統語構造の線形化が強勢位置に関する情報を参照するか否かという違いが、(1a, b)が許す焦点解釈の差異をもたらすと論じる。

## 2. 提案

現行の極小主義統語論では、統語部門は階層構造だけを作り、語順はその後の音韻部門への外在化の過程が指定すると仮定される (Chomsky 2013 等)。線形化が外在化の過程で適用されるのであれば、線形化は統語表示に加えて音韻表示も参照できると考えられる。また、Kayne (1994)は、線形順序はすべての要素の間に成立する完全(total)な関係だと指摘する。これは線形化が指定する語順それ自体には当てはまるが、線形化に用いられる非対称関係も完全関係であるべき必要性はない。もし線形化が複数の非対称関係を参照できるとすると、それらの個々の非対称性が非完全関係でも、それらを組み合わせることで結果的に完全関係としての語順を出力できれば、線形化は正しく遂行される。そこで、本論は以下の提案を行う。

- (2) **提案:** 統語表示と音韻表示から得られる複数の非完全(non-total)な非対称関係が線形順序を指定する。

以下では、(2)に沿って具体的な線形化手続きを導入する。まず、Collins (2017)に従い、主要部-補部関係と支配関係という 2 種類の統語的非対称関係がそれぞれ線形化に用いられると考える。("x < y" は x が y に語順上先行することを示す)

- (3) a. Head-Complement:  $\{X, YP\} \rightarrow X < YP$   
b. Domination:  $\{XP, \{Y_P \dots X_P \dots\}\} \rightarrow XP < YP$

XP に YP が付加した構造<XP, YP>は set-merge によって作られる構造 $\{XP, \{Z_P X_P, YP\}\}$ であると仮定する (Omune 2018)。この構造では、XP の上位コピーと ZP の間では(3b)によって XP < ZP が指定され、XP の下位コピーは削除されるため、結果として XP < YP が得られる。この(3b)適用の特殊例を(3c)に定式化する。

- (3) c. Adjunction:  $\langle XP, YP_{Adjunct} \rangle = \{XP, \{Z_P X_P, YP\}\} \rightarrow XP < YP$

音韻表示に基づく線形化に移ろう。Tokizaki (2018)に基づき、(核)強勢の有無が線形化に参与すると仮定する。英語では、強勢を含む構成素が右側に配置される。

- (3) d. Stress:  $\{XP, YP_{[stress]}\} \rightarrow XP < YP$

ただし、統語的な線形化と音韻的線形化が異なる語順を指定する場合、前者が適用される。すなわち、(3d)は(3a-c)が適用されない節点に対して最後の手段として適用される。(4)における主語 John の線形化では、(i) vP 指定部にある John の下位コピーを用いて(3b)により John < T' を導く線形化と、(ii) John の強勢をもとに(3d)により T' < John を導く線形化が考えられるが、上記の理由により(3b)の適用が優先され、(i)が採用される。

- (4) a. JOHN won the game.  
b.  $\{TP \text{ JOHN}, \{T, \{vP \text{ John}, v'\}\}\}$

## 3. 分析

前節で導入した(3a-d)によって HNPS と無標語順がどのように線形化されるかを示す。まず HNPS の例(3b)の線形化を考える。本論では、統語派生は vP, CP のフェーズ単位で進行し、その補部である VP, TP が循環的に線形化の適用を受けると考える (Fox and Pesetsky 2005)。すると、(3b)の派生は(5a, b)のように進む。まず(5a)が完成した段階でその補部の VP が転送・線形化される。この時、(3a)により bought < DP<sub>obj</sub> が得られる。その後、派生が CP フェーズに至ると(=5b)、TP が転送・線形化される (ここでは、目的語 DP が VP 補部から vP の端に移動している)。v'では(3a)によって v < VP という語順が得られる。vP1 は娘節点の 1 つである John が下位コピーであり発音されないため線形化はそもそも適用される必要が無い(cf. Takita 2020)。続いて vP2 は(3c)によって vP1 < PP と線形化される。T', TP は(3a), (3b)によってそれぞれ T < vP3, John < T' と線形化される。

- (5) a.  $\{\nu P \text{ John}, \{\nu' \nu, \{\nu P \text{ bought}, \{\text{DP a painting...}\}\}\}\}$   
 b.  $\{\text{C}, \{\text{TP John}, \{\text{T T}, \{\nu P3 < \nu P2 \{\nu P1 \text{ John}, \{\nu' \nu, \overline{\text{VP}}\}\}, \{\text{PP for his mother}\}\}, \{\text{DP a painting...}\}\}\}\}$

問題となるのは  $\nu P3$  の線形化である。 $\nu P3$  は(3a, c)によっては線形化できない。また、線形化が転送領域単位で適用されるとすると、DP とその下位コピーは別の転送領域に存在するため下位コピーの存在を参照できず、(3b)も利用できない。ここで最後の手段として(3d)が適用される。このとき(i)  $\nu P2$  が強勢を担い  $\text{DP} < \nu P2$  が得られるか、(ii) DP が強勢を担い  $\nu P2 < \text{DP}$  が得られるかの可能性がある。ここで相矛盾する線形順序の指定を禁じる Fox and Pesetsky (2005)の順序保持(Order Preservation)を考えると、(i)の線形化は VP の線形化によって得られる  $V < \text{DP}$  という順序と矛盾するため排除される。結果的に、(ii)だけが収束する。

よって(1b)の線形化では、(3d)の適用のために目的語 DP が義務的に強勢を担う。ここで Reinhart (2006)にしたがい強勢を伴う構成素、またはそれを含むより大きな構成素が文の焦点として解釈されると仮定する。すると、HNPS の線形化で義務的に強勢を担う目的語 DP が義務的に焦点解釈を担うことが正しく予測される。

続いて、無標語順(1a)の線形化を検討する。

- (6) a.  $\{\nu P \text{ John}, \{\nu' \nu, \{\nu P \text{ bought}, \{\text{DP a painting...}\}\}\}\}$   
 b.  $\{\text{C}, \{\text{TP John}, \{\text{T T}, < \nu P2 \{\nu P1 \text{ John}, \{\nu' \nu, \overline{\text{VP}}\}\}, \{\text{PP for his mother}\}\}\}\}\}$

まず  $\nu P$  フェーズの完成に伴い VP が転送される(=(6a))。VP は(3a)によって  $V < \text{DP}$  と線形化される。その後、CP フェーズの完成に伴い TP が転送される(=(6b))。 $\nu'$ は(3a)によって  $\nu < \text{VP}$  と線形化される。 $\nu P1$  は娘節点の John が発音されない下位コピーであるため線形化は不要である。 $\nu P2, \text{T}', \text{TP}$  は、(3c), (3a), (3b)によってそれぞれ  $\nu P2 < \text{PP}, \text{T} < \nu P2, \text{John} < \text{T}'$  と線形化される。このように無標語順の線形化は統語的な(3a-c)の規則のみによって線形化でき、最後の手段である(3d)を適用することはない。ゆえに無標語順(1a)において(3d)の適用が強勢位置を固定することはなく、それに従って焦点位置もまた自由であることが正しく予測される。

#### 4. 焦点位置の可変性

以下の例が示すように、Williams (2003)は、HNPS が複数の焦点解釈を許すことを報告している。

- (7) A: John gave all the money in some container to Mary. What container?  
 B: John gave to Mary all of the money in [the SATCHEL]<sub>F</sub>. (Williams 2003: 34)
- (8) A: What did John do?  
 B: John [gave to Mary all of the money in the SATCHEL]<sub>F</sub>. (ibid.)

本論の分析において、HNPS の線形化は目的語が強勢を伴うことを要請する。Reinhart (2006)の強勢-焦点対応規則では、強勢を担う要素、またはそれを含むより大きな構成素が焦点解釈を担う。したがって、(7B)においては強勢を担う SATCHEL 自体、(8B)においては SATCHEL を含むより大きな構成素である VP が焦点解釈を担うことを正しく予測する。どちらの場合も目的語が強勢を含むため、問題なく(3d)によって線形化可能である。

#### 5. 結論

本論は、線形化は統語構造と音韻構造を参照し、複数の非完全な非対称関係に基づいて線形順序を指定すると提案した。この提案のもとでは、無標語順は統語的非対称性のみで線形化可能であるのに対し、HNPS は音韻的非対称性も用いる必要がある。順序保持の制約を遵守しながら音韻的な線形化を正しく適用するために、HNPS では強勢が目的語に義務的に配置される。以上の線形化方略から、無標語順における焦点位置の自由度、HNPS の固定的な強勢位置、そこから導かれる焦点解釈の限定的な可変性を正しく説明できることを示した。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (2013) "Problems of projection," *Lingua* 130, 33-49. / Collins, Chris (2017) "Merge (X, Y)={X, Y}," *Labels and Roots*, ed. by Leah Bauke, Andreas Blümel, and Erich Groat, 47-68, De Gruyter Mouton, Boston/Berlin. / Fox, Danny and Pesetsky, David (2005) "Cyclic linearization of syntactic structure," *Theoretical Linguistics* 31, 1-45. / Kayne, Richards (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, The MIT Press, Cambridge. / Omune, Jun (2018) *Reformulating Pair-Merge, Inheritance, and Valuation*, Doctoral dissertation, Kansai Gaidai University. / Reinhart, Tanya (2006) *Interface Strategies*, The MIT Press, Cambridge. / Rochemont, Michael S. and Culicover, Peter W. (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge. / Takita, Kensuke (2020) "Labeling for linearization," *The Linguistic Review* 37 (1), 75-116. / Tokizaki, Hisao (2018) "Externalization, stress, and word order," *Proceedings of Sophia University Linguistic Society* 32, 18-34. / Williams, Edwin (2003) *Representation Theory*, The MIT Press, Cambridge.